

グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」

「コンフリクトの人文科学」セミナー 第12回

<報告1>

1960年代における国際美術シーンの  
アメリカ化について：ロバート・ラウシェンバ  
ーグの活動を中心に

大阪大学大学院人間科学研究科 GCOE 特任助教

池上裕子

<要旨>

第二次世界大戦終結以降、世界の美術の中心はパリからニューヨークへと移行したと言われる。その事実を決定的なものにしたのが、1964年のヴェニス・ビエンナーレで、ロバート・ラウシェンバーグがアメリカ人として初めて大賞を受賞したという出来事である。本報告では、ラウシェンバーグの国際活動を中心に、1960年代の国際美術シーンが、様々なコンフリクトを伴いつつも急速にアメリカ化した背景を、現在のグローバル化した美術界の起源として検証する。当時アメリカ政府の支援を得て海外で積極的に展示されたアメリカ美術が「上からのグローバリズム」を体現するものだったとすれば、各国の美術家達は圧倒的影響力を持つアメリカ文化やその美術にどう対峙したのか。パリやストックホルム、東京などの都市における、アメリカ美術に対する憧憬や反発を具体的に紹介しながら、戦後の国際美術シーンを支配した力学について考察したい。

<報告2>

文化芸術の公共性と  
社会的コンフリクトの研究

大阪大学大学院人間科学研究科 GCOE 特任研究員

吉澤弥生

<要旨>

近年、国内外の文化政策の進展や市民参加型アートプロジェクトの増加など、文化芸術の公共性や社会性に注目が集まっている。だがたとえば文化政策といういわば「上から」の力と、現場を担う様々な立場の人々による芸術創造の実践と運動という「下から」の力はしばしば齟齬をきたす。そのコンフリクトをめぐる状況からは、「市民社会」や社会運動のあり方、文化芸術の社会的位置づけに関して、問題とともに新たな可能性の萌芽を見いだすこともできる。本報告では、報告者が04年から参与観察を続けている大阪の事例（大阪市の文化事業「新世界アーツパーク事業」「ブレイカープロジェクト」と、08年02月の欧州調査（アイルランド、ボローニャ、バルセロナのキュレーター、アーティスト、アクティヴィストへの聞き取り）をふまえ、文化芸術の公共性について、1 文化政策、2 パブリックアート、3 芸術と社会運動、の観点から考察する。

日時 2008年6月5日（木） 17:00 ～ 19:00

会場 大阪大学大学院文学研究科（豊中キャンパス）

文・法・経講義棟1階11教室（参加無料）

（<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/about/map/toyonaka.html> に地図があります）

問い合わせ先：

大阪大学大学院人間科学研究科人類学研究室

e-mail [globalra@hus.osaka-u.ac.jp](mailto:globalra@hus.osaka-u.ac.jp)

電話 06-6879-8085

06-6877-5111

【報告者略歴は裏面をご参照ください】

【報告者略歴】

池上裕子

大阪大学とイエール大学で近現代の美術を専攻、2007年イエール大学で博士号取得。専門は戦後アメリカ美術。主要論文に *Dislocations: Robert Rauschenberg and the Americanization of Modern Art, circa 1964* (Ph.D. dissertation, Yale University)、「ラウシェンバーグの《ゴールド・スタンダード》：現代美術のグローバル化に関する一試論（『美術史』158号）がある。現在、博士論文を基に単行本を準備中。また、戦後の国際美術シーンにおける日本美術の文化的アイデンティティ形成についても調査の対象を広げている。

吉澤弥生

2003年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了、博士（人間科学）。専門は芸術と文化の社会学。武庫川女子大学などの非常勤講師を経て07年9月より現職。追手門学院大学、成安造形大学非常勤講師。また04年より大阪のNPO法人地域文化に関する情報とプロジェクト[recip]で活動、05年より理事。近著は「文化政策と公共性」（『社会学評論』vol.58, No.2, 2007）、「大阪市『新世界アーツパーク事業』にみる文化政策の課題」（櫻田和也・吉澤弥生・渡邊太『文化政策研究』1、2008年5月）、「行政とNPOの協働 ―芸術創造の現場から」（吉澤弥生・櫻田和也『季刊家計経済研究』79、2008年7月予定）。